

のでしょうか。

沖縄を離れてもう20年が過ぎました。そろそろ同窓の皆に会いたいです。

早いもので

琉球大学附属病院 救急部 花城 和彦

早いもので卒業して24年が経ちました。生来臆病な性質なので、なるべく冒険はせず、なるべく目立たず、決まった枠から外れないように生きてきたつもりなのですが、気がつくとかかなり外れた道を歩んでしまいました。事の始まりはやはりあのラットかな?と思います。

卒後に臨床医でなく基礎研究医として生理学教室の院生になり、すぐに結婚したこともあり、生活がこれまでとは一変しました。とにかく新しい環境に適応するのに精一杯で、研究もなかなかうまくいかず、同級生には「いつまで基礎にいるのか?」とよく聞かれました。学位取得後には内科に入局する心積もりでしたが、4年経っても論文ができずに鬱々としておりました。当時はモノクローナルラットIgEの作製に取り組んでおりました。何しろ使用する培養細胞は適度な細胞密度に保ってやらねばならず、ちょっと手を抜くと性質がどんどん変わり、以前出したデータとはまるで違ったデータが出てしまう始末。良い状態に増えた細胞集団をスケールアップすることやクローニングするタイミングを見極めるのに四苦八苦しながら何匹ものラットと生活する日々を送っていました。さすがに疲れ果てた6年目の夏、ラットの脾臓からかなりの数の細胞を採取でき、ミエローマ細胞との融合も上手くいったことがありました。ちょうど気分転換に県内北部のリゾートホテルでのんびりしようと思えば、それを考慮して培地の補充とコロニーチェックのスケジュールを組みました。しかし出かけ先でも気になるのは細胞のことばかり。とうとう一匹のトトロのような巨大ラットが夢に現れ「もう僕の事は良いの?もう本当に良いんだね?」と優しい、でも物悲しげな表情で語りかけてきたのです。「今度こそうまくいく!ラットとはこれでおさらば!」と直感し、すぐさま夜道に車を走らせ研究室に行き、培地交換とクローニングを実行。そして後日、トトロの予言通りに数枚のELSAプレートの中にモノクローナルIgE作製成功を示す緑色に輝く一つのwellを発見。今でもあの胸の高鳴る感動は忘れることができません。

おかげでそのまま基礎研究に身を置く事になってしまったわけです。

その後スイス(バーゼル)のFMIでの留学を経て、アメリカ(OH→FL)の研究所で働き、実に多くの方々のお世話になりました。勝手の分からぬ生活とこれまでとは違った研究内容に戸惑うことも多かったのですが、ラボの仲間と切磋琢磨しながら研究する楽しさを実感することができました。ファミリーを大事にするアメリカではAACRの元ディレクターVande Woude先生と会食する機会に恵まれ、「自分に近い人たちから大事にしてください。家族、ラボメンバー、研究所の人たち。順番を間違えちゃダメだよ」と仰り、「上司にペコペコする必要はない。それより若い人に良くしてあげなさい。」と若手研究者の教育の重要性を熱く語っておられました。確かにスイスでもアメリカでも大学院生は大事にされており、皆に温かく見守られ育てられていたものです。特にFMIでは若手育成のためのシステムが整っており、毎週のラボミーティングに加え、1年に1度は研究所のランチオン・プレゼンテーションが義務付けられ、研究ジャンルの違う研究者達から貴重なアドバイスがもらえ、これ以上ない贅沢な環境が整えられていました。時には辛辣なコメントが投げかけられたりもしていましたが、彼らはそれに動じることなく、逆にさらに突っ込んだ解決手段や新たな視点がもらえるための糧として、それぞれに研究の精度をあげていくのを目の当たりにし、本当に驚いたものです。

現在は琉大の救急部で20歳以上も年下の先生方、スタッフの皆さんにご指導いただいております。私の年齢と医師としての技量とのギャップにおそらく戸惑っていらっしゃる事でしょう。同級生からは「次、どうするのか?」と心配してもらっています。救急外来は一刻を争う生死に直接関わる場ですから実は毎日ビビり怖気づいています。家に帰して良い患者さんなのか、ダメな患者さんなのかの判断に常に迷い、帰宅させた後も気になります。そんな毎日ですが基礎研究と同様、臨床でもチームで仕事をする事に変わりはないと思います。個人的にスキルアップを図ることは言うまでもありませんが、冷静に自己の限界を把握し、スタッフ同士お互いに尊重し合い、意思疎通しながらより良い医療提供をしていけるようにこれからも精進していきたい、とそんなことを考えている今日この頃です。